The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	『松浦宮物語』における狭衣和歌の影響
Author(s)	長尾, 佐知子
Citation	詞林. 1994, 15, p. 53-60
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/67348
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

『松浦宮物語』における狭衣和歌の影響

長尾　佐知子

一

作者や受容者の実態の把握が難しいとされる鎌倉時代物語の中にあって、定家作をほぼ認めうる『松浦宮物語』は異色の存在である。定家の、中世和歌、あるいは、『源氏物語』などの物語文学への貢献は、いまさら言うまでもない。この中世を代表する偉大な人物を通して作品を眺めることは、『松浦宮物語』という一作品だけではなく、鎌倉時代物語の諸相の解明をも促すこととなろう。

作者定家を意識しつつ『松浦宮物語』を論じたものとしては、菊地仁氏「物語作家としての藤原定家－松浦宮物語の位置づけ－」（1）をあげることができる。氏は、『松浦宮物語』を、「新古今風形成期における藤原定家の詩語意識覚醒の書」ととらえられている。古歌の言葉を再評価し、実作にいかすという歌人としての定家の営為に、『松浦宮物語』を位置づけることが可能、との説である。具体的な作者像を踏まえた上での指摘であり、注目に値する。和歌だけに限らず、『松浦宮物語』は、多くの先行文学から多様な影響を受けている。定家の先行文学摂取が詩語探求を意識したものであるならば、その行為は、もはや、たんなる模倣の域を越えているといえよう。そこで、本稿では、菊地氏の説を念頭におきつつ、『松浦宮物語』における『狭衣物語』の影響を確認していくこととする。『源氏物語』や『浜松中納言物語』ではなく、『狭衣物語』に注目するのは、定家が『狭衣物語』を評価していたらしいことがうかがえるためである。たとえば、『明月記』貞永二年三月廿日条に、

日来撰出物語月次、［十二月五所、］不入源氏並狭衣、［於歌者抜群、他事雖不可然、源氏当時中宮被新図、狭衣又院御方別被書、］　＊［　］内は割注

とするように、定家は、『源氏物語』と同様『狭衣物語』を評価しており、中でも作中和歌に注目していたことが知れる。『松浦宮物語』が定家の手になる作品であるならば、その中で狭衣和歌が占める位置も大きいはずである。また、狭衣和歌と、当時の歌人との関わりの深さも、この物語に注目する理由の一つである。狭衣の作中歌の巧緻で趣向が新しい点が、中世歌人

に支持されたことは、諸氏の説かれるとおりである（2）。おそらく、定家も、そうした中の一人であっただろう。それならば、その物語創作の際に、とくに狭衣作中歌に目を向けつつ、この物語を摂取したということは考えられないだろうか。以上の観点から、おもに和歌表現に対する『狭衣物語』からの影響の様相を明らかにするとともに、狭衣和歌利用の意味についても考えたい。

二

『松浦宮物語』の計七十一首の和歌の本歌・類歌は、萩谷朴氏が角川文庫本にまとめられている。その中には、一見万葉風ではあるが、『狭衣物語』の作中歌を考慮しなければ解釈できない歌がある。

5　いたづらに　あかせるよはの　ながき夜の　あかつき露に　ぬれかゆくべき

6　あかつきの　露のその名し　もらさずば　われわすれめや　よろづ世までに　（［二］宴のあと）

＊『松浦宮物語』本文、歌番号、表題は、角川文庫本による。以下同様。

この弁少将と神奈備皇女の歌は、「あかつき露」、「あかつきの露」とあることから、万葉風歌として数えられている。『新編国歌大観』でみるかぎり、「暁露」の例は、『万葉集』以後しばらく見られないので、これらを万葉風とすることは妥当である。問題は、「暁露」という万葉風の言葉を、定家がどこで知ったかである。

大津皇子竊下二　於伊勢神宮一　上来時大伯皇女御作歌二首

・吾勢祜乎（ワガセコヲ）　倭辺遣登（ヤマトヘカルト）　佐夜深而（サヨフケテ）　鶏鳴露尓（アカツキツユニ）　吾立所霑之（ワガタチヌレシ）

（『万葉集』巻二相聞　一〇五）

・高円之（タカマトノ）　野辺乃秋萩（ノヘノアキハギ）　皆之（コノコロノ）　暁露尓（カツキツユニ）　開兼可聞（サキケカモ）

（『　同　』巻八秋雑　一六〇九）

・皆之（コノコロノ）　暁露丹（アカツキツユニ）　吾屋前之（ワガヤドノ）　茅子乃下葉者（ハギノシタバハ）　色付尓家里（イロヅキニケリ）

（『　同　』巻十秋雑　二一八六）

・比者之（フノコロノ）　五更露尓（アカツキツユニ）　吾屋戸乃（ワガヤドノ）　秋之萩子原（アキノハギハラ）　色付尓家里（イロヅキニケリ）

（『　同　』巻十秋雑　二二一七）

五番歌の本歌といわれる『万葉集』一〇五番歌もふくめ、『万葉集』における「暁露」は、旅立ち、または、秋の言葉として詠み込まれるが、いずれも『松浦宮物語』の例にそぐわない。ところが、定家に近い時代になると、

きえかへりものぞかなしきみちしばのあか月つゆのおきてかへるは（『林下集』二一三　詞書「恋廿首よみしに」）

のごとく、「露が置く」と「朝に起く」を掛詞とする、後朝の別れの歌に詠まれるようになる。こうした例は、『千載集』二四〇（崇徳院御製、『久安百首』三三）、『六百番歌合』七八八（隆信）などにもあり、定家自身にも、

宿になく八こゑの鳥はしらじかし置きてかひなき暁の露
（『拾遺愚草』九九一　題「鳥五首」、『正治初度百首』一三九四　題「鳥」）

とある。つまり、「暁露」は、定家周辺では、本来の万葉語とは異なる、派生した意味が通用しているのである。『新編国歌大観』で見る限り、その唯一の先行例は『狭衣物語』である。

秋の日もはかなく暮にければ、とのより、「いかなれば、今日の御使は、今まで、いかに」と、返々きこえさせ給ふも、いと聞きにくければ、わたり給ひぬ。御使には、上人の数にて候ふ右衛門の権の佐といふ人ぞ、参らせ給ふける。その御文には、

まだ知らぬ暁露におき別れ八重たつ霧にまどひぬるかな　（巻三　大系二七七頁）

結婚第一夜の翌日、狭衣が一品宮に贈った歌である。『松浦宮物語』5番歌、6番歌は、正確には後朝ではないが、それに近い夜を過ごした男女が交わした歌である。「暁露」という言葉に限って見た場合、定家は狭衣和歌から、直接、あるいは間接的に影響を受けたと見てよいように思う。

ただし、こうしてみてくると、定家は「暁露」という詩語を意識したのではなく、『狭衣物語』の巻三の該当場面全体にひかれた結果、この言葉を採用したのではないか、という疑いが起こってくるであろう。もちろん、その可能性はある。しかし、

人のもとにはじめてまかりて、つとめてつかはしける

・つねよりもおきうかりつる暁はつゆさへかかる物にぞ有りける　（『後撰集』巻十三　恋五　九一三　読人不知）

（女につかはしける）　よみ人しらず

・身をつめば露をあはれと思ふかな暁ごとにいかでおくらん
（『拾遺集』巻十二　恋二　七三〇、『拾遺抄』巻七　恋上　二五一　題不知）

などの例からわかるように、「露」や「暁」を後朝の歌として詠むこと自体は、はやくから行われていたのである。よって、定家は、『万葉集』も『狭衣物語』も理解したうえで、万葉語の「暁露」を『狭衣物語』の作品中に見出し、詩語と認識して利用した、と考えて差し支えないであろう。定家の詩語に対する鋭い意識が、狭衣和歌の一つの言葉を掘り起こしたのである。

＊　＊　＊

とどめし袖のうつり香につけては、枕さだめむかたもなく、いかにねし夜のかなしさの、身をせむる心地すれば、

45　まどろまず　ねぬ夜にゆめの　みえしより　いと　どおもひの　さむる日ぞなき
（〔三五〕輾転反側）

謎の女との夢のような逢瀬を、実感できずに苦しむ弁少将の歌である。「ねぬ夜にゆめ」は、女と過ごした一夜を指すと思われるが、これに近い表現として、「ねぬ夜のゆめ」がある。

・軒ちかき花たちばなの匂ひきてねぬよの夢はむかしなりけり

（『正治初度百首』一六二九　「詠百首和歌　夏　沙弥寂蓮」、『続古今集』巻三　夏　二四八　詞書・作者「正治にたてまつりける百首の夏歌　寂蓮法師」、『寂蓮法師集』二三三　詞書「百首歌めしける中に」）

・片敷きの袖の氷もむすぼほれとけて寝ぬ夜の夢ぞみじかき

（『正治初度百首』四六七「秋日詠百首応製和歌　冬　左大臣正二位藤原良経、『秋篠月清集』七三六　冬十五首）

・唐衣いかにかへして逢ふことのねぬよの夢にならんとすらん

（『仙洞句題五十首』二九六　題・作者「寄衣恋　大僧正」）

定家以前では、右にあげた例以外あまり見いだせない表現であるが、『狭衣物語』には次のようにある。

やがて寝られ給はで、つとめても、いと疾う、「御心地のおぼつかなさ」など、きこえ給て、「さても、今朝は、例ならぬ心地に惑ひ侍りて、

面影は身をも離れずうちとけて寝ぬ夜の夢は見るとなければ」

などやうに聞え給へりつる。　（巻四　大系三九一頁）

宰相中将妹君のもとで、うちとけないままの一夜を過ごした狭衣が、翌朝その母君に贈った歌である。「寝ぬ夜の夢」は、『狭衣物語』に始まる表現と見てよいだろう。それにならった歌が、定家と同時代以降に見られ、『松浦宮物語』にも近い表現が見られることに注意したい。

＊　＊　＊

『狭衣物語』の作中歌の詩語利用は、定家を含めた中世歌人に共通の手法であったようである。興味深いのは、そうした状況が、『松浦宮物語』に反映していることである。「暁露」・「寝ぬ夜に夢」の発見と再生は、定家の詩語意識が働いた結果である。そして、それは、当時の歌人の詩語に対する姿勢でもあったと思われる。

三

前節では、狭衣和歌が中世和歌に与えた影響の一端と、『松浦宮物語』への反映をみた。次に、このように摂取された詩語が、物語の中で再生される様相を、次に確認していくことにする。

謎の女との逢瀬は、『松浦宮物語』の中で、とくに優美に印象的に描かれているように思われる。その一場面に、次のような和歌の贈答がある。

47「てにとれば　あやなくかげぞ　まがひける　あまつ

そらなる　月のかつらに
なにの契りにか、かかるあやしきものおもふらむ」
とながしそふれば、
48「草のはら　かげさだまらぬ　露の身を　つきのかつらに　いかがまがへむ
まことのすみかも、へだてきこえむとにはあらねど、あらはれば、いとおそろしううとまれぬべき所のさまになむ、思ひわびぬる。よしいまは、みきとばかりもかけざらむや、いとひすてらるる道のなさけならむ」
（［三六］朝雲無迹）

実は月の桂（鄧皇后）なのではないか、という弁少将の問いかけを女はかわす。その歌にある「草の原」は、『源氏物語』花宴巻を思い出させる。

「猶名のりしたまへ。いかで聞こゆべき。かうてやみなむとは、さりともおぼされじ」との給へば、
うき身世にやがて消えなばたづねても草の原をば問はじとや思ふ
と言ふさま、艶になまめきたり。「ことはりや。聞こえ違へたる文字かな」とて、
「いづれぞと露の宿りを分かむまに小笹が原に風もこそ吹け
わづらはしくおぼす事ならずば、なにかつゝまむ。もし、すかい給ふか」
（新大系二七七～二七八頁）

「名のりし給へ」という光源氏と、それをはぐらかす女の関係は、『松浦宮物語』の弁少将と謎の女のそれに等しい。「草の原」は、「決して名乗ろうとしない女性」のイメージを導き出す。さらに、この朧月夜と源氏の許されざる関係は、弁少将と鄧皇后の罪を強調する。このように幾重にも仕組まれた演出は、「草の原」という一語によるのである。

花宴巻では、その後、光源氏がとりかわした扇に女を懐かしみ和歌を詠じる、という展開となる。

かのしるしの扇は桜がさねにて、濃き方に霞める月をかきて、水にうつしたる心ばへ、目馴れたる事なれど、ゆへなつかしうもてならしたり。「草の原をば」と言ひしさまのみ、心にかゝり給へば、
世にしらぬ心ちこそすれ有明の月のゆくゑを空にまがへて
と、書きつけ給ひて、をき給へり。
（新大系二七九～二八〇頁）

あの朧月夜の「草の原」の歌が、「月のゆくへ」という歌を引き出している。「月のゆくへ」は『松浦宮物語』にも、
27　よしここに　我がたまのをは　つきななむ　月のゆくへを　はなれざるべく
（［一四］九月十三夜）

とある。菊地氏の前掲論文でも指摘のある27番歌は、華陽公主と弁少将との関係におけるものである。氏は、『浜松中納言物

語』の和歌も含め、詩語「月のゆくへ」への認識の深まりが、鄧皇后という新たな女主人公を導き出した、とされる。その言葉と呼応する「草の原」が、先に引用した謎の女との場面におかれているのである。

「草の原」、「月のゆくへ」といった花宴巻の利用は、定家の『源氏物語』の花宴巻評価と解釈してもよいだろう。ここで気になるのは、俊成の花宴巻に対する態度である。

・　十三番　枯野　左勝

女房

見しあきをなににのこさむくさのはらひとへにかはる野辺の気色に

右

隆信

しもがれの野べのあはれを見ぬ人や秋の色にはこころとめけむ

右方申云、くさのはらききよからず、左方申云、右歌ふるめかし判云、左なににのこさんくさのはらといへる、えんにこそ侍るめれ、右方人草の原難申之条、尤うたたある事にや、紫式部歌よみの程よりも物かく筆は殊勝なり、そのうへ花宴の歌はことにえんなる物なり、源氏見ざる歌よみは遺恨の事なり、古、心詞あしくは見えざるにや、但、常の体なるべし、左歌宜し、勝と申すべし

（『六百番歌合』冬部　五〇五、五〇六）

・　三十三番　左勝

親定

君ももしなぐめやすらんたび衣あさたつ月を空にまがへて

右

左大臣

うつの山うつつかなしき道たえて夢に都の人はわすれず

左、朝たつ月を空にまがへて、と侍る心すがた、源氏物語の花のえんの歌などおもひ出でられていみじくえんにみえ侍り、右歌は、うつつの山うつつかなしき、など侍り、近来うつつの山越あまたきこえ侍るにや、仍左勝に侍りにしなるべし

（『水無瀬恋十五首歌合』六五、六六　俊成判）

それぞれの判に、花宴巻の「草の原」、「月のゆくへ」の歌が引かれている。ここで示される俊成の花宴巻賞揚が、御子左家の特徴となり、当時の歌壇の動向にもつながるのは、周知のことだが、その動きと、『松浦宮物語』の和歌とが重なるのである。この俊成の判詞を根拠に、『松浦宮物語』の成立年代を論じるつもりはない。ただ、『松浦宮物語』にあらわれた定家の詩語に対する意識が、時流に従うものであることに注意したいのである。

ところで、「草の原」というと、もう一つ忘れてはならないのは、狭衣和歌である。

「物思ひの花」のみ咲きまさりて、汀がくれの冬草は、いづれとなくあるにもあらぬに、「『尾花がもとの思ひ草』は、なを、よすが」と、思さるゝを、むげに霜枯れ果てぬる、いと心細う思し侘びて、

尋ぬべき草の原さへ霜枯れて誰に問はまし道芝の露

あさましう、誰とだに知らずなりにしかば、なを、「思ふにも言ふにもあまる」心地（ぞ）し給へる。ありとも、かどくしくまことしきさまに思ふべき程にはあらざりつれど、「飽かぬ別れ」は、何にもまさるなればにや、「たちまちに見るまじき物」とは給ひかけ給はざりつれ、何心もなく恥しうらうたげなる気色のしたりつる面影のみ、身を離れぬ心地し給ひけり。（『狭衣物語』巻二冒頭大系一一九頁）

行方不明となった飛鳥井女君を思う狭衣の和歌は、それ自体が花宴巻の和歌を引用しているので、定家が直接『狭衣物語』を典拠としたかどうか、これだけでは判断できない。だが、『松浦宮物語』には、48番歌「草の原」の続きに、

「秋かぜをだにまたぬ別れの道には、ありかさだめぬあまのなのりもまして」

という謎の女の言葉がある。この「あまのなのり」は、狭衣が、自分の正体を飛鳥井女君に隠すために述べた言葉と一致する。

「かくおぼつかなき有様の、頼み難さのつらきにや」と、心苦しけれど、「かく思ひかけぬ有様を、暫し人にもしらせじ」とのみ思せば、「我身をも、「海士の子」とだに名のり給へ。さらば」など、心くらべに言ひなして、

（『狭衣物語』巻一　大系七五頁）

この場合、名乗らないのは女ではなく、男の方という違いはあるが、「名乗らない女」のイメージが、『狭衣物語』の「草の原」の歌からもきていることがわかる。

また、『狭衣物語』の「草の原」の引用の続きに、「思ふにも言ふにもあまる」とみえる（巻二冒頭引用部分の点線部）。これは、『発心和歌集』七番歌、

称讃如来
各以一切音声海、普於無量妙言詞、尽於未来一切却、
讃仏深心功徳海
おもふにもいふにもあまるふかさにてことも心も及ばれぬかな

の上句の引用と思われる。抑えきれない感情を表す表現で、狭衣が源氏宮へのやりきれない思いを詠む歌、

七車積むともつきじ思ふにも言ふにもあまるわが恋草は

（『狭衣物語』巻四　大系四三〇頁）

にも使われている。『松浦宮物語』でも、

43　思ふにも　いふにもあまる　ゆめのうちを　さめてわかれぬ　ながきよもがな

まれまれいふともなきいきのしたに、

44　ふりすつる　人にはやすき　わかれぢを　ひとりやさめぬ　ゆめにまどはむ

思ひいりたる気色のあはれにかなしきには、げにいそがれし道も、たえはてなむ別れぞ、さしあたりてはおもひさましがたき。

（［三一］巫山湘浦）

と、謎の女に弁少将がよみかける場面がある。このことからも、定家が「草の原」に、『源氏物語』だけでなく、『狭衣物語』をもみていた、ということがわかる。

では、謎の女とのやりとりに、『狭衣物語』を利用する定家の意図はどのようなものであったのだろうか。右の［三一］巫山湘浦の43、44番歌は、「ゆめ」と「わかれ」がキーワードである。とくに44番の女の歌の「わかれ」には、翌朝の別れと、弁少将の帰国にともなう永遠の別れとが重ねられている。一方、『狭衣物語』での狭衣と飛鳥井女君は、その後、海を隔てて永久に離れてしまう。いま、夢のような逢瀬を重ねる弁少将と郁皇后には、今宵限りの別れだけではなく、狭衣と飛鳥井女君がたどったのと同じ運命が待ち構えているのである。『松浦宮物語』にこめられた『狭衣物語』は、二人の永遠の離別を暗示するものであると思われる。

四

定家は、『源氏物語』花宴巻、ならびに、『浜松中納言物語』を巧みに利用しつつ、弁少将と郁皇后の恋の場面を演出した。その先行物語の列に、『狭衣物語』の飛鳥井物語も加えてよいかと思う。その摂取は、おそらく、「草の原」という、花宴巻にも共通する詩語を意識したことがきっかけであっただろう。和歌の言葉としての機能以上の生命を吹き込まれた詩語は、伝統に育まれた基盤で物語を支えるようになる。こうしてはじめて、詩語の再生は実現するのである。同じ「草の原」に、俊成は花宴巻だけをみている（前掲『六百番歌合』判詞）。「草の原」に『狭衣物語』をもみるのは、定家のみではないとは思われるが、定家だけが、『狭衣物語』の世界を再現することに成功している。その斬新な視点を評価すると同時に、それを可能にした『松浦宮物語』の存在に意義を認めたい。

注

（1）『国学院雑誌』八二―二　昭和五十六年二月。

（2）寺本直彦氏『源氏物語受容史論考』（昭和四十五年風間書房）、および『源氏物語受容史論考続編』（昭和五十九年風間書房）、久保田淳氏『新古今歌人の研究』（昭和四十八年東京大学出版会）などに指摘がある。

（ながお・さちこ　本学大学院博士前期課程）